

優秀賞

大切な絵本

畠山 菜穂子

柳田邦男先生、はじめまして。私は昨年4月に娘を出産し、母親になりました。私と娘の絵本の時間は、娘の首が座った生後3か月ごろから始まりました。自分が子供の時に買いそろえてもらった沢山の絵本の中から、文章の短いものを選んで実家から持ってきていました。はじめての絵本は、「わたしのワンピース」にしました。次々とワンピースの柄が変わっていくかわいらしい絵本で、私のお気に入りでした。正面にバウンサーを置き、娘を座らせて、向いあって絵本を読みました。最初は絵本を娘に向けて逆さまから読むのが難しく、

手間取っていると、娘は「ぎゃーっ」と泣いて騒ぎだし、なかなか最後まで読めませんでした。そのうち、要領を得て、逆さまから絵本のページをすらすらめくれるようになりました。娘は、あまりゆっくり読むと泣き出すため、テンポ良く読みました。そばで聞いていた私の母は、「そんなに速く読むの」と驚いていました。それから、「おおきなかぶ」、「あたし、ねむれないの」など、私が好きだった絵本を次々に読んであげました。今、思えば0歳児にはまだまだ字が多く、長いお話しばかりでした。

私の母もそう思っていたのか、ある日、「いないいないばあ」の絵本をプレゼントしてくれました。私が小さい時、大好きで本が壊れるほど読んだため、実家にはもうありませんでした。私自身は、

この絵本のことをあまり覚えていませんでした。

絵が子供向けにしては大人びた雰囲気で、特にキツネの顔付きは少し怖いように思いました。しかし、短い文章で、その頃の娘にはちょうどよく、よく読んであげる絵本の一冊に加えました。

娘が生まれて半年が経つころ、娘は一日の生活のリズムができ、お座りをするようになっていました。そこで、毎日寝る前の時間に、お布団の上でお座りして絵本を読むようになりました。この頃は、絵本を読んでいると噛むのが大好きで、どの絵本も角がちょっぴりかじられてばさばさになっていました。ある日、いつものように絵本を読んでいると、娘は次に読もうと思ってそばに置いてある絵本に手を伸ばしました。また、カジカジ（噛む）するのかな、と思っていると、娘はペー

ジをめくりはじめました。「上手、上手」と言いながら薄いページを手のひらで一枚一枚めくっていくことに感心していました。ふと、娘がページをめくりながら、「あー」と言っていることに気づきました。娘がページをめくっている絵本は「いないいないばあ」でした。よく娘を見ると、「ばあ」のページで「あー」と言っていました。やっとな、「ばあ」と言っていたことに気づきました。「ちゃんと聞いていたんだ！」とその瞬間、強い衝撃を受けました。これまで、絵本を読んでも一方的で、時には私の自己満足ではないかと思うこともありました。しかし、そうではなかったのだ、娘はちゃんと聞いていたのだ、ということに気づきました。

『いないいないばあ』の絵本を通じて、私は娘

が一つの成長の階段を確かに上ったことを感じる
ことができました。このことは、私と娘のコミュニ
ケーションに微妙な変化をもたらしました。私
は娘が「私の言葉を受け取っている」という確信
を持って語りかけ始めました。娘は私が覚えてい
なかったように、大きくなったら「いないいない
ばあ」という絵本を覚えていないかもしれません。
しかし、「いないいないばあ」は私にとって娘の成
長を知らせてくれた大切な絵本となりました。こ
のことをいつか、機会を待って、娘に伝えたいと
思います。母が私にしてくれたように。